近代政治文藝

（卅九年）

本間文庫
文庫 14
A111
9

近代欧州文藝史

文庫14
A111
9

近代独逸文藝史綱目

第一 緒論

第二 クラシシズムとローマンティシズム

第三 十九世紀ローマンチシズムの變遷

第四 ローマンチシズムの始め

第五 スツールム、ウント、ドラング

第六 ゲーテとシラー

第七 佛のローマンチシズムの始め

(1)

早稲田大学図書

近代欧州文藝史（卅九年九月十三日より）

第一、緒論

近代の講義は必ずしも系統を立てず 近代の欧州文藝の全般の概念を與へやうといふのであるから 諸種の方面から極新鮮な講義をするのである。実は一種の文藝論と見てよい、本来ならば文藝の中でも造形美術を中心として何程でも使つて見やうと思つて居つたが材料がまだ手に入らなかつたから主に文藝を中心にして行く。

十九世紀を指すのである。歴史上で説明し

(2)

近世は十五六世紀學問復興以後のを指すが、文藝の上にこれを見ると、十六世紀の前半は伊太利に Leonardo da Vinci, Michelangelo, Raphaelo, Titiano レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランゼロ、ラファエル、チシアン等の絵画彫刻建築の造形美術を中心とし其の後半は英国にスペンサー、シェークスピヤ等の文學を中心とし十七世紀は佛蘭西に Corneille ~~一~~ Molière Racine 等の文學を中心とし、十八世紀は更に十七世紀の系統を受けて、佛蘭西の文藝が最も勢力有る地位をもつた。而して此の十七八世紀に佛蘭西を中心として栄えた一風の文藝は世界之を概称してクラシズムといふ。

蓋し此のクラシズムは一はラテン民族の自然の特性が何となくこれに向いて居るにも依ろうが一は其の歴史的意義もあろう。即ち仏が其の前に民族たりしおラテンの文藝を祖述するを以て誇りとするといふのは自然の事であろう。加ふるに当時ラテン語を研究してこれで古代の文物を

③

研究するとするのでありつたのが、後には稍つてラテン時代の文藝の精神を換

すゝめを与ふるに至つて、即ち古典的と呼ばるゝものが是れで希臘

羅馬の文藝の特色たる典雅、沈静、均整などいふものが文藝の様式

の理想として~~[illegible]~~尊崇せられ、劇作は三一致が先づ説かれ建

~~[illegible]~~築にも絵画にも~~[illegible]~~同様の古典的な

趣味が横溢して来て、勿論一概に斯うは言つても其の中に細かい消長

は無論あつたことを忘れてはならぬ。例へば建築は所謂ルネサンスの華

麗なものが、必ずしもクラシカルならざる方向に走つた併し稍や十八世

紀の後半はまた目純のクラシカルに復つて、絵画の如きも十八世紀の

後半に寧ろ[illegible]剛振をも[illegible]みなつて

~~[illegible]~~のでまあ一斬してクラシカルといふことは仏の文藝の生命であ

つたと見てよい。而して当時の英吉利は丸ではと見ると先

(4)

り仏の野蛮の下にあつて、英の詩壇が大のポープに擬すしめはクラシカルといふ風味の文藝であつて。此ではは国家の文学がしエーンゲーテの一寸前後の人一己の力で起さすまでは佛の乃ので、国言語学者まで仏語が其ばればヴォルテアなどが崇拝せられた。

云ふば十九世紀の新文藝が眼目を醒ます前までの暗黒は一言で蔽ふば「クラシカル」であつたといつてよい、それが此れを先蹤として英国之れに次ぎ即して仏国といふ順で十九世紀の新機運を造り出した其他伊太利でもスペーンでもポアランドでも、略同じ気運を感じたのが十九世紀後の文藝である、即して其の新しい機運は精神界に於ける一種の革命として、あらゆる他の部面の革命と九時に併して起つて。此の十九世紀の精神的運動を近来はローマンチシズムと呼ぶ。此の気は略一致して居る。要するに十八世紀より十九世

への移りかはりはクラシシズムよりローマンチシズムへの移り変りである。されば此の二語の意義を先づ知つて置く必要がある。

第二 クラシシズムとローマンチシズム

(6)

第二　クラシシズムとローマンチシズム

Classicism といひ Romanticism といふ語は主義の変化進化が
ある。然し茲では出来るだけ美術の分類を説く必要なので
ヘーゲルの分類法を数へると彫刻の美学の根本思想は
理想が具象して出て来る。と共に美が表はれるのである。而して
其の具象に抽象から却て順序が即ち美術の分類
の出来る所以で、之は年代的にも美術の特徴的にも見
られるのである。之れを三つに分けて Symbolische
Klassische, Romantische とするのである。彼れに依
れば内容と外形、具象と抽象との別が根本にあって、其の

⑦

内容が漸次外形に表出せられる事を即ち抽象的のものから
次具象的になって来ることで此の三段は生ずる、建築(Baukunst)
Plastik と (Malerei) Musik 乃 Poesie との三要中第一は即
Symbolische Kunst 第一の代表で第二は Classische
Kunst の代表 (Plastik と仕なら彫刻をなす) 第三は Romantische
Kunst の代表である。第三代表即ち此斯なるなが絵画
四の美術は Symbol 形で (時代的には) 第一は彫刻を以て
建築を以て代表せられる 代表せられる Classical 基督教の美術
は其の形式の 形式 である。而して此に 芸術として之味は内容
の表し(信ずる) 外形の勝ちたる美術即ち理が十分に

具象して発展してきた美術である、真の美術には入（美術、材料が勝つて…）
られ得ぬ、即ち実用的建築と云ふ上に重きを置かれてゐる
ものである、次は内容外形が凡平均する位に内容が発展し
てゐるものであるから言はゞ我等の見聞する外形（即ち材料）が直ちに直観
せられる内容が発揮してゐる美術である、第三は即ち材料
が微く隠れて内容が一層良く露出的に表現せられてゐる美
術である。
ヘーゲルのこれ丈けであるが、Symbolic と云ふ語の近代のこと義はむしろ
重じてゐる少なくとも其の価値に於いて重じてゐる。ヘーゲルでは
此下のこと意味があつて後年では此下のこと味がなくなつて
来て象徴と云ふ義に於いても材料が勝つて内容の現はれ

(9)

隠れて居るといふ考もむしろ内容が〔其の使用して居る〕材料には直接し兼ねれな
りで抽象の考を出やうとするともいへる、Schelling が名づけて Ideal
といつてゐるのが却つて十分よく説明十字架を標して基督とい
ふ思想感情を之に表徴せしむるの類である。十字架の文字
を Symbol といふのも同理である 我の Volkelt 氏が System der
Aesthetik の第二 Symbol といふ語義を二分即ち狭い
意に近い例である。彼は十字架の例をば普通の場合の象
Symbolisiren であるとし審美の範囲では Vorstellungs Symb.
Veralgemeinernde Symb. Stimmungs Symb.
の三方がつく甲は偶合な別する象に於て寄するもの（乙
は一部を取つて全を標するもの、丙は感情を分明に世界

(10)

哀しかこりが魂に或る気の下に張動してゐると感ずるものであると」

(11)

前回でClassicといふ語は殆ど近代の用語例は内容含まず
て外形之に備へず、單なる標示に止まることを見るとい
ひ、從にClassicといふ語もヘーゲルでは内容外形の程よく
合致したものといふのであるが近代のて義は寧ろ内容
をはなれて外形を偏重してしまつたとも云へる。従つて此れでは
（昔しは内容と一致して外形一様に見られ得たのが）
のヘーゲルがきしてる推論しておるのに對して瞭下のことになる、
「創作する場合には先づ内容で其の内容もヘーゲルのでない限
りは尊ばし[illegible]又付論の語の様にも古典のある事もない
十七八世紀の仏文藝を中心りして[illegible]ある作品をとして
でけの作品が希臘拉典の古典を尊崇して之れを外形的に

(12)

摸するに至ったのを指すので然しも希臘彫刻の根本作物を指すのではない。従って外形のみを摸することは即ち内容の之れに叶はざることとして其下の意味となってゐるのである。ヘーゲルのいふ如く希臘彫刻の作物が内容外形調和してゐるかはこゝにあって外形が内容に勝ちすぎてゐるかは別問題である。只古曲の形式は協整統一なるを好むに乃代の之れを見て協整統一なりとするから其の子風の之をこゝに普通のと異なる事のある近世趣味近代は

Classical 即ち Classic であるので。前はつは ヘーゲルがクラシカルといつくる外囲形の内容の会話を云ふ ヘーゲルは Real とか Ideal と評して 希臘の方執れは其れであるといつてゐる。

次にRomanticと云ふのは例の詩であるヘーゲルは内容の外形に勝つて文藝となるから不可解である之を近代の人の國解釈を挙げるとBeers氏のHistory of English Romanticism in the 19th Centuryに其に此の語の意義を評して居るが頗る細かいから之を引いて見ると（以下英文稿本 十三ノ一―十四ノ三を用ゐ）

(14)

斯やうに複雑なる味があるローマンチックと云ふ語の意義は三
小を作つて少しく注意して且つ正確ならしめる工風をしなくて
はならぬ
にて藝術の根本的であるが、中世の文藝は希臘の文藝は一言
體系的である。希臘では Homer, Phideas は言ふまでもなく
Aeschylos, Sophocles 等の戯曲とてもこれを見ては
なから運命の不思議を見せる。中世の文藝でなからその
詩已に於て近世的であるが然し中心は言ふまでもなく基督教
である。これを理智的乃至暗黒自然の感情的とのみ見よ。然るに此
此感情の主張に向つて形体 近世に及んで
知識の其居から伸び宗教の抑壓から伸び騰び破れ

(15)

relation between Realism and Classicism

て来て、即ち近世の死んだ文芸復興期の特色は古典的人道的
現世は罪とする意であつて、故に古典的
とするものは文芸に於ては往々にして不幸を来たす。空論を恐るべき
文芸は将に近代の文芸としては価値がないが、さりとて古典崇
て其の他方ある感情が抑はる如きになると文芸の中心の主
義は評判しておく、現世人間の批評とか論判とか議論とか言ふことを
が重になつて、同時にそれん味をつける言としては外形の
制限が、勝つて来る、加ふるに仏蘭西では前にいつて
れし古典の模倣 古代の形式の模倣 とかなんとかいつてきたがいよく形式的になつて
来ての主なるが文芸進歩の結果として十七八世紀の偏重を中心
として行けれて文芸の様式である。古典的、形式的、現実

的といふ事が客観規律的な十七、八世紀頃の文藝の特色といつてよい。Molière, Racine, Corneille, Dryden, Pope 一派の人々が代表して居る文藝は即ち是である。従つて之が否認して起つたのが周期其の直反対なるものに至るは即である。即ち十九世紀の初期に勃起して起つてきたのは其の知識的なるに対して情緒的ならんとし、其の形式的なるに対して内容的ならんとし、其の規定的なるに対して超規定的ならんとした。前に掲げたビーアス氏の語る特色のむきは此等此の三点の何れかが浮動するものであらう。

(17)

第十三、十九世紀ロマンチシズムの変遷

十九世紀のローマンチシズムに情緒的、（空想的に対する）形式的に対する内容的、現実的に対する超現実的とも云ふ三つの傾向あることを述べたが、之が十九世紀を流れて了ふ状態を見るに先ず情緒的と云ふことは其の極まるところが感傷主義 Sentimentalism を産む、之で Welt~~schmerz~~schmerz とも云ふ詩も才能と連なつて居る厭多恨の性向を示して来た、英の Byron、独の Goethe の Die Leiden des jungen Werther、又は Heine の詩作、佛では Chateaubriand の諸作など皆此の気分の代表的である、Child Harold とは凡て青春の人

(18)

が理想なる世界なりとあこがれて居る当時の時代精神を表はしたものである。第二の内容的ことなさとは形式に対する中身といふ段から（巧みに対する自然として）さきに移つて、一種の自然主義 Naturalism を生んだ。Rousseau が自然に還れといふ、ワーヅワースが自然と呼んだもの[illegible]が好んだことを表してゐる、併し後に佛の Flaubert や Zola、[illegible]等の主唱した自然主義は多少の意匠を加へてある。蓋し（文藝上の）現実主義（又は写実主義）の Realism は Naturalism と結して如何の関係を有してゐるか茲で一言にして言へば、現実主義は乃ち十九世紀に至まつてものでは[illegible]

はないまのお存在主リングは、前にもいうとおり氏の

(19)

名を第一義の文藝に對して居る。而して其の内容の解釈もさまぐできるが、人によつては二を自然主義と称び同義に解して居る。又た個々にして居る所もある。要するにともに主観の我れの影を避けて客観をありのまゝに描かんとする点はれ似て居るが併し同時に異つて居る所もある。現実主義の本義はむしろ作者客観界の外形の自然を写さんとする技に在る自然主義は其の内容の自然を写さんとするに在る、前者は本来は藝術の手段方法の自然に忠ならんとするにあり部分的である、後者は目的の自然に忠ならんとするにある全体的である、一は形を写し一は自然の精神を写すと云ふ如き意義がある。之が両者現実主義のロー

(20)

ナリズムを通過した形跡ある[illegible]に於ではなりか写実主義が内容的になつてのである。斯や一ナトラ[illegible]ワーヅワース等に植ゑ[illegible]自然を光とせよと叫んだのが一層宣伝され Naturalism 形になつて来て。史家でも例へば仏の評論家は此を[illegible]はロマンチシズムの反動なりと見[illegible]は云ふが逆説なりと見るの見方がある、予はむしろ此点の意味で連続と見る方が妥当に変遷[illegible]（時として[illegible]）してある。

ブルンチエール Brunetière の説、自然主義の impassibilité impersonnelle 純粋外界描写を主とした[illegible]

同じくブルンチエールの social になつて来たりとの[illegible]の他のものでもある。

Rosenberg の説は自然の対象を條件の[illegible]に[illegible]として[illegible]たる、

無理なる、醜、悪の描写、Sensualism に入る、Sexualism は

情の発利戦、中誤身の描写、といふ二者があり得る

Sensualism.

Nakedness

Ugliness

Interpretation

(Impressionism)

Truth.

(21)

ローマンチシズムの十九世紀に於ける変遷中其の主義の一、情緒的、二、内容的とふたつの無遠をば設て即ち自然主義写実主義の干係まで説いて置いたから(これを巡かせんに内容的といふものは自然主義のみならず、理想主義と云ふものをも生んで居りて理想主義とふ派は強いが其の中にはShelley等もなく書かれ評といふ如き理想に向上するのも、在来の浪漫の字気に止まる傾向になして一のローマンチシズムであるし、シラー等のなく自由、ふの犯土などいふものを理想として示を鼓吹するも一の理想主義のローマンチシズムであるし ゲーテのファウストなどの如く哲理的なのも一の理想主義のローマンチシズムであるし

(22)

する、而して近代の[illegible]選つては[illegible] 或は
比較的[illegible]的科学的なる、ブラ[illegible]等と共に[illegible]向的
なる、イブセン等となり、写象的なるトルストイ等と[illegible]は
なつて。
次に極現実的なるはゾーラ、リッチ、ワグナー等の極自然的部状
的なる状態[illegible]乃至、[illegible]等の[illegible]があつて
前者はおのづから探偵的[illegible]なる、探偵的なるもの detective
story 秘密なるの secrecy を主としたるも、第二に随し、後者は
後の歴史小説と連絡した、また彼の外面的なる一局の作品に於
じ精神の赤である。

卅四　ローマンチシズムの始め

ローマンチシズムの始めは前にも云ふ如く既にある。（以上　卅一年迄）

稿　40頁より46頁邊までを入れ了）

卅五　スツルム、ウント、ドランク

（旧稿　47頁より49頁まで）

卅六　~~独~~　ゲーテとシラー

此の両人は恰も右のスツルム、ウント、ドランクの気を代表して大文学を成した好代表者である。~~即~~即ち行方は違つてゲーテは其の若いセンチメンタルの一面から、~~[illegible]~~後半の古典

(23)

出られ様種完成の言はゞ胎生より始つて妥当に至つ
て様々なる方から其の作物に現はれて来て居る代表
する者はファウストともいつやう、シラーは始生まで自由の
ために戦ひ到計的犯生の為に我等の戦ひをば捨て始めて
が、然も其の晩作ヴィルヘルム、テルなどではシュトルムと始め
つりて劇団〔ロイゲルなどの〕の作の如きは大にワイルドなスツルム、ウント、
ドラング的なるものは完成の為め穏やかな所へ
色を新しうある。（一）ドイツゲーテ、シラー伝、旧稿50pより
69pまで
ゲーテ曲伝はおつかう第一第二の三期に分れて前ゲーテ
ール(ム)、ウント、ドラングを代表してある。

(24)

第七　仏のローマンチシズムの起り

前述の如くして独国の文藝のローマンチシズムは起って来て、クロップストック、ヘルデル、レッシング等を創業期として、ゲーテ、シラーに大成したが、之を文学の黄金期と呼んで居る。然して英国は之に倣りて（同時の影響を受け）文世紀の新文藝を起こされ即ワーヅワース、コールリッヂ（スコット）等のローマンチシズムが現れて居る。之は近年の論議も識る仏は後日まで仏見て居るが、仏のローマンチシズムの新文藝は独英の後に出る（以下旧稿第二號 P.103 以下を見よ）

(25)

欧州近代の絵画

欧州ノ（近世十五世紀）絵画史はそれだけでも容易ならぬ研究であるのを茲で僅かに一回の講義で尽さうといふのであるから難事業なるは言ふまでもない、たゞほんの大体を話すに過ぎぬ、欧州の絵画史の其前期を一言すれば（先づ近世史に従って）諸種文藝復興期の萌芽たる十四世紀に端を発して　よからう、即ち其の中心地は伊太利であることは他一切の文藝も同じで近世文明の揺籃であるのである。而して十四世紀は文学にダンテあれば又絵画に近世絵画の遠祖たる Giotto di Bondone (1266?–1337)

(26)

さて、由来早時基督教期の絵畫は全然寺院の用より
外なく従って中世暗黒期にあっては絵はただ
一の様式 号純的なものから稍進んで基督の像を描いた
しか許されなかった、然るに十三世紀頃からやっと絵の形式が
進んで来て遂に Picture panel とするものが生まれ
て此の頃までは壁にかけるべく絵といっても Mosaic などいう如く
絵としては Fresco 即ち壁畫でなかったので其場所は
寺内及び Catacomb 即ち地下納骨堂であって、
ビザンチン風とくと同じ状 此時の点では
絵を見れば暗し 絵がなく之をビザンチン風と呼ぶのは
前のコンスタンチン帝の首都
東羅馬帝國の

(27)

コンスタンチノープル）が其の発祥地であつたからである、而して此派の最後最後を代表して居るのが夫の Giovanni Cimabue (1240－) である、彼れはビザンチン派の最後では引出されたが、実は既に昔から新気運は動きかけて居た、それが其の弟子たる前に言つてのジオットに至つて始めて顕著になつてこのジオットを以つて近世派が画の祖を以てばジオットと共にチマブエを挙げねばならぬ。而してジオットに至つて成つて新気運といふのは絵画が宗教的偶像的なものから離れて独立した美術になりかけて来たといふ

(28)

好きである。御批評すると、いづれも其題目が基督教的であるとか其の応用場所が寺院であるとかいふことは意味なんかは此勢であつて、批評とはそんな意味ではない、絵画の手法精神が批評し丸ゐの目になつて居ることを即ち線が出つて線で不自然な色で模様や偶像のやうなものを書いてゐるのが其の線が段々柔かくなり其色が実際的になり平面であつたのが凸凹が出て来るとかいふ風にあるすに自然の生きた形象に近づいて来てのである。路る自然的になつて来てのである。再好に来てこれをジオットーの手なり込むとりふ、自然に還れとするさとが比頃名れても新機運の端であつて

といはまし。真の Christian painting の始めての大天才は此の
画家にて之を称せんか、此人の始めて生まれた感情を生き
る人君子近づきしものを感ずることも書かんと力めたり其の
画風生々情緒の気は当時の同時代の絵画界に生気
を与へ影響を与へて、其の後は同じ流れの荒き期で十四
世紀の絵よりも十五世紀の前までに及んで而して此又
外形上のうたて絵の銅版彫刻 [illegible] engraving
及び油絵 Oil painting の流れ発見完成せられし中にも
油絵具は画界に一革命を来たし十五世紀絵よ
り絵はフレスコ画よりも此方の画が勢力を占めるに

(30)

至つて、此油絵畫法の完成されは運倒
千之る七八十年に亘つて生れた（北部畫家）Eyck兄弟の
効とせられる。去て十五世紀の後半期に其の末から
十六世紀の初にかけて前までオツトー以後盛なる畫
家の絵を受けて出て来て大家が夫の Leonardo da
Vinci (1452—1519) である。彼れ能くして盛縮
伊太利絵畫の黄金時代が始まる。彼れは其時代の他の天
才のやうな彫刻にも建築にも其大さを一つの
なちざるなしといふ様であつて、彼の畫風は在来の
あらゆる範囲を離つて理想的とも写実的とも
何れとも名付けやうもない渾然たる大藝

(31)

であると称せらる、其田舎の低い切妻でも大木の
Michael Angelo の壁画 有名なる Sistine である（Heaton's
History of P. P. 70）之は伸でさへ之に比ぶ適当
であり且屢々害を蒙って尚は其の姿を保ちて居る
が世界の二つか三つの大画の一である、さて
レオナルドに続いて大の Raphael、~~Michael Angelo~~
Michael Angelo、Titian の三大家が出て
すみいよく伊太利絵画は十六世紀前半に於いて
世界絵画史の最高潮に達する

(32)

十六世紀の中頃すぐれた美術家の時代を代表する三人の巨人に
Michael Angelo Buonarotti
(1475–1564)は始め画家の弟子となって師匠を驚かす程の腕を其少年時代から技は
これ併し彼もともすれば彫刻の方に甚好
が向いて来た、彼は非常に……あった上に
入ってフローレンスの君主
ることとなり非常の待遇を受けた、この保護の下に勉強
ロレンツォの死と共に諸所を流浪して廿一の時始めて首都ローマ
に来て、此時はまだ大家を成すには至らず 始めて Pietà
と呼ぶ像で知られ 1500年フローレンスに帰り 有名の像
を刻んだ 之が彼の此時代の最大作である。後 ダビンチと競

(33)

年を経ての後をみせし の[illegible] [illegible]の壁画を画い

思ひて居る中にミケランゼロが天下の大彫刻家であつて当

時の法王Julius二世が急にローマに呼び寄せ自分の

墓の彫刻をさせんとしたが法王の建築師ブラマンテ

が之を嫉み讒して死後の準備は不吉なことといつて

のび折角用石が一日して石代も払つて呉れなかつてミケラン

ゼロ大に怒つて憤然として去つたが法王は方法を講じ

て彼を呼返した結果[illegible] Sistine

Chapel の天井画を書かせんとした彼は[illegible]らしくなく

且助手としても[illegible]から気は進まなかつたが遂に之を決

して[illegible]のが遂に其の名画となつたのである

(34)

はイが夫のラファエルもローマに呼ばれてヷチカンの壁画を書いて居る時であつて実に天下の壮観であつた。そしてラファエルの方は助手も多し弟子もあつて仕事はだん\/進行するに反してミケランゼロの方は一向に仕事が捗らず悩[illegible]王はちんぼうに堪へられずミケランゼロは[illegible]ことも出来なかつてそして出来るのが彼の創造の図で世界驚嘆の一つと称せらるゝ絵である。（今日の完成である）王を継いでジュリアス二世の墓を完成せんとしたが法王は既に[illegible]王はさつて気もあり其のでの見るなモーゼの像を彫刻んでみであとは出来ずていなくしてモーゼの像は今はローマのさるお寺である。続きてフロレンスのロレンゾの墓の為に

夜、朝、夜明、薄明（Night）（Morning）（Dawn）
（Twilight）の四像を刻んで之を彼の作中の大作と
称せられる。ミケランジエロはラファエル及びダヴィンチと並び生存を争ふて
且彫刻で又詩歌絵画を能く善く一種な藝術家であつて、
彼の作の特色は其の力と強さとの秀抜なる所にある
と称せられる。ラファエルのクリスチャン的な敬虔な態度を選んだに
比してミケランジエロは希臘的で、肉体の美しさを写
く描き之に依て大なる感動をやつたと称せられる。又彼は
彫刻的才能も優れて
あると称せられる　且建築的技術も好んで彫刻に

(36)

之が、あつた理由であらうが同時に彼れは[illegible]らうか左

の理想的なのに反して写実的であるを[illegible]

も時々其からざるを得ず併し彼れは如何にも写実的[illegible]

の才ではない其の描く[illegible]を見ても大いに理想的なるが

ある、但し其の精神から云へば有るまじき史學ある

自分で偉大なる感想を入れんが為には造り了て其

手腕の力は実に此のあるまじきものを有るらしく見て

ゐる、要するに彼れの作に対して何人も最も彼れが

声一感は[illegible]、偉大、強壮、荘厳と云ふべきである、

Raffaello Santi (西1483—1520)

Raffaello Sanzio（1483－1520）はミケランゼロの[illegible]実的現実的なるに対して理想的な清純高貴な画像の大家であつた。其の意味は精神の美を現はすを中心としてゐるからと信せらる[illegible]て其精神は基督教の信仰による[illegible]の感情を表したものといはれる。由来此人は性格的非常に[illegible]で他人の作を模することに[illegible]つてしかし[illegible]して総合[illegible]つては[illegible]これを消化融合すると称せられる。[illegible]ここに此人の画風の集大成的のものであることを見ずして[illegible]る中にも如何は[illegible]の[illegible]を[illegible]之丈見方けの[illegible]程との画を表はして[illegible]用や[illegible]なるビザンチン式な基督教的な調をもつて[illegible]が中[illegible]フローレンスに来てはレオナルド、ダビンチ、及びミケランゼロの二大家の作を見て[illegible]嘆し[illegible]~~[illegible]~~此等の人々の影響を少なからず受けて、更に[illegible]口上に来て[illegible]に来た時は[illegible]和[illegible]して[illegible]

(38)

のみになつて大成した。それは表現しなければに居した密な[illegible]抽的基
本的の藝術と内的統一、有限的の藝術とは再びここらせれと
ラファエルとに分離して[illegible]大なるものとなつてとれ見る。こゝからこゝも
が理想を主とすればラファエルは信仰を主とするといはる。今後の作を年代
を追つて進歩の跡を追及して行けば不一期ペリウジノの影響を離れする
時代から完全にする　作品や　代表作品より　作品で代表せ
しめる。

（以下 Madonna によつて作を物する　へびいる[illegible]）

(39)

十五、六世紀の頃に伊太利其の他諸国では及び Flanders 即

今のベルギー、仏蘭西の一部にかけた地方に絵画が萠芽

した。併し伊太利は其の時代に隆盛されたのではなく、

さて右のフランダースの絵を Flemish 派と呼んで其祖たる

ものは前に一言した Van Eyck 兄弟であって、彼等は

絵を最も更に其油絵具で美術史上の大功を見せる

Hubert (1370?–1426) and Jan (1390?–1440) Van Eyck である。

彼等が油絵具の発明は偶然で其の絵の上に油を

引いて後を出す風であって試みるとき日光の為に絵が損じた

そこで何か日蔭で早く乾く油はないかと工風した末研究

中第の方法は化学の試験もあってそれで其ワニスの上

風をして[illegible]甲たるの地と natの地とか（亜甲く飾しきを
細めの宗教を二枝地のとも混じて当時に風して之れ諸具を混じて
用ゐるさまを為へ好みて甚だ様子の、色の配居に好みたる且れなど
に換ゆるの為の少々さなりを甚だ見せしれの本であるといふ
又その傑作[illegible]式[illegible]は仕似て代表的[illegible]作て[illegible]ある。
~~独逸の十七世紀~~ 又 ◎日耳曼では Albrecht Dürer
(1471–1528) 又 Hans Holbein (1497–~~[illegible]~~1543)
◎の名が最も著しい。併し西班牙に覇権は伊太利にあつたのであるが
十七世紀に入ると絵画の主要権が Netherland 及西班牙に移つて
來る時となる。即ちこれより Netherland の絵画は、ベルギー派の Flemish
派と和蘭派の Dutch School とに分れて前者には Peter Paul
Rubens (1577–1640) Anthony Van Dyck (1599–

Italy

Ap. 16th – Ap. 17 Guido Reni (1575–1642)
Caravaggio (1565–1609)

(150)

(1641) の如き畫家あり 終りには Rembrandt 出る。
此に西班牙では Velazquez (1599–1660)
Murillo (1618–1682) を出した。
十八世紀に入っては英國が画界の覇権をにぎるともいへる それは
山水畫家の畫 Landscape painting とするものが出で 基礎
を固めたのである。William Hogarth (1697–1764)
Joshua Reynolds (1723–1792) Thomas
Gainsborough (1727–1788) 等が此の期の畫家である。
3、而して（十八世紀の末から）十九世紀に至っては佛が繪畫の中心となり
独、英がこれに副たる形となった。